S.M.T.クエスト

現地　晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓ．Ｍ．Ｔ．クエスト

【Ｎコード】
Ｎ６９２８Ｘ

【作者名】
現地　晶

【あらすじ】
かつて、勇者によって倒された筈の魔王が復活した。
ご先祖様の尻拭いをする為とその他諸々の理由で、勇者の子孫達は旅に出る。

※ご都合主義でダラダラと進む、よくある展開のギャグ話です。残酷描写、流血描写、ブラックな表現が苦手な方は回避をお願いします。

1　たぶん魔王復活（前書き）

この作品の登場人物は、基本的に流血しています。
また、残酷描写、ブラックな表現、相手に対して敬意の感じられない発言等もあります。
それらに少しでも嫌悪を抱かれる方、現実と妄想の区別の付かない方は、回避をお願いいたします。

1　たぶん魔王復活

かつて、世界を恐怖に陥れた『魔王』。
その魔王が勇者に倒されてから長い年月が経ち――今、世界は再び暗黒に覆われつつあった。

◇◇◇◇◇

「というわけで、伝説の勇者の子孫、神官ミイナよ。復活した魔王を退治しに行くがよい」

世界の東に位置する『神職者の国セイン』。その城の一室で、王は神官ミイナに命じた。
「王様、そうあっさり言われても……」
ミイナが唇を尖らせて、椅子にどっかりと座っている王を見つめる。
ミイナは背中まである金色に近い明るい茶色の髪と、少し幼い顔立ちが特徴的な十六歳の女の子である。そして、かつて魔王を倒した伝説の勇者の子孫でもあった。
「いいから行くがよい」
王がしっしと手を振る。
「無理です、王様」
「そもそも伝説の勇者がしっかりと倒していなかったから、魔王が復活したのじゃろう？　先祖の尻拭いは子孫の役目じゃ」
「そんな無茶苦茶な……」
ミイナは愛用の杖を握りしめて唸る。別に勇者の子孫に生まれたかったわけでもないし、それで今まで何か得をした覚えも無い。そ

れなのにどうしてこんな時だけ、ご先祖様の話が出てくるのだ。
「兵を退治に向わせるというのはどうでしょうか？」
王が首を横に振る。
「兵は国と余を守るので手一杯、それに平和な時代が続いていたから、はっきり言って驚くほど弱いのじゃ。そんなことはミイナも知っておるじゃろう」
知ってはいるが、だからといって『じゃあ行ってきます』とはミイナも言えない。何故なら――。
「私、回復魔法しか使えないのですが。剣も使えないですし、これでどうやって戦えと……？」
「余など、王であるのに魔法も剣も扱えんぞ。昔と違い、現代では魔法を使える人間なんて、世界中にほんの一握りしかおらん。その中で最上級回復魔法が使えるだけミイナは立派じゃ」
ミイナが「うっ」と言葉に詰まる。
「いや、でも……、それに第一、魔王って本当に復活しているんですか？　誰かが確認したわけでもないですし……」
王は眉を寄せ、窓の外を見た。
「まがまがしい気配を感じるじゃろう？」
「まあ、微かには」
「黒い雲がちらほらあるし、空気も淀んでおる。魔物の活動も活発になっておるから、たぶん復活したのじゃろう」
「たぶんって……」
肩を落とすミイナに、王は視線を戻した。
「しかしまだ、復活したばかりで力は弱い筈じゃ。今のうちにサクッとやってくるがよい」
「サクッとって言われても、だからどうやってですか」
「隣国にも勇者の子孫がおるじゃろ？　世界には他にも勇者の子孫がおる筈じゃ。その中にはきっと強い者もおる。集めて魔王の元に行くがよい」
「『筈』とか『きっと』とか『たぶん』とか、そんなのばかりじゃ

ないですか！」
「余も怒りたい。なんでよりによって余の時代に復活などするのじゃ」
王は椅子から立ち上がると、ドアへと向かった。
「ほらミイナ、こちらに来い」
「もう！　王様！」
廊下に出て行った王を、ミイナは仕方なく追う。王は「こっちじゃ、こっち」と言いながら、城の外へとミイナを連れて行った。そして――。
「ほら、立派じゃろう？」
王が庭に置いてある、一頭立ての幌馬車を指差す。
「この馬車をやろう。着替えなどの荷物も積み込んである。さあ、急がないと魔王が力を取り戻してしまうぞ」
こんなものまでもう用意していたのかと、ミイナが驚く。あくまで王は、ミイナを魔王退治に行かせる気なのか。
「でも王様、やっぱり無理で――」

「皆の者ー！　伝説の勇者の子孫、ミイナが魔王退治の旅に出るぞ！　盛大に見送るがよい！」

突然、王が叫んだ。
「王様！　何するんですか！」
ミイナが慌てて王の口を手で塞いだが、遅かった。近くに居た人々が集まり、騒めき始める。

「魔王退治？」
「ミイナが？」
「おお！　何という勇気！　さすが伝説の勇者の子孫！」

焦るミイナをよそに、人々からワッと拍手が起こった。

「頑張れ！」
「頑張れミイナ！」
「応援しているぞ！」
果物屋のおばさんが、果物を持って駆けてくる。
「これ、もって行って食べなさい」
花屋の女の子が花束をミイナに差し出し、門番をしていた神官兵が、ミイナの為に祈りを捧げた。

「……うぅ、いや、違……」

嫌と言えない雰囲気に、ミイナがたじろぐ。その隙をついて王がミイナの手を振り払い、強引に馬車の中へとミイナを押し込んだ。
「王様ぁ」
「行くのじゃミイナ。国民の期待を裏切るでない」
「……私に対して相当悪いことしていますけど、自覚はありますか？　王様」
もう断れそうに無い。ミイナは悔しさを滲ませて王を一度睨むと、御者席に向かう。
「御者くらい用意してくれてもいいのに」

「行け、ミイナよ！　そなたなら必ず魔王を退治できると信じておるぞ！　祝福を！」

調子のいい王に溜息が漏れる。
「王様、無駄に煽らないで下さい。はぁ、もう……！」
やけくそ気味に覚悟を決め、ミイナは手綱を強く握った。
「はいはい。行けばいいんでしょ！」

大歓声の中、取り敢えず隣国にいる勇者の子孫に会いに行くことに決め、神官ミイナは馬車を走らせた。

2　死相が見えるんです、たまに。

「ひぎゃー！」

今まで生きてきて、一度も出したことのないような絶叫が口から飛び出す。

「や、やば、怖……」

魔物の数が増えている。以前はたまに見かけるくらいだったのに、今は周辺に、魔物がゴロゴロといた。これも魔王復活の証なのか。

ミイナは必死で馬車を御して、走り抜ける。弱い魔物ばかりだが、それでも回復魔法しか使えないミイナにとっては強敵だ。

睡眠も休憩もせずにひたすら逃げまくり、翌日の朝、ミイナはやっと隣国に辿り着いた。

「つ、疲れた……」

セインから少し西にあるのがここ、『魔法使いの国マジンタ』である。

もっとも、『魔法使いの国』と言っても、実際に魔法が使える者は僅かしかいない。むしろ『魔法研究の国』という方が現代では合っていた。

「久し振りだな、マジンタ。確か家はこっちの方に……あ、あった！」

目当ての勇者の子孫の家を見つけ、ミイナは馬車を止める。そして馬車から降り、レンガで出来た小さな家のドアをノックも無しに開けた。

「おーい、生きてるー？　ってーーえ！？」

家の中に入った途端、その惨状にミイナは驚き目を見開いた。

うっすらと埃の積もった室内、散乱した書物、そして――血塗れで倒れる男。

「何してるの！？」

ミイナは男に駆け寄り、回復魔法を唱えた。

「カンチ！」

眉が微かに動き、男は目を開ける。

「う……あ、ミイナ？」

「レイ、大丈夫？」

ミイナが床に座り込み、男の青白い顔を覗き込む。

「……ああ、ありがとう」

男の名前は『レイ』。

肩まで伸びた濃い茶色の髪、細身の体、優しい瞳の美男子である。そしてこの魔法の国で数少ない、本物の魔法使いでもあった。

レイはのろのろと体を起こし、血のべったりと付いた手を額に当てた。

「色々調べてたら、吐血しちゃって……」

ミイナが溜息を吐く。

「相変わらず体が弱いね。さっきちょっと死相が見えたよ。気をつけなきゃ駄目！」

レイは苦笑して頷いた。

「ところで、ミイナがマジンタに来るなんて珍しいね。どうしたんだい？」

同じ勇者の子孫として、子供の頃に両親を亡くしたミイナの後見人をレイはしている。それゆえにレイがミイナの様子を見に定期的にセインまで行くので、ミイナがマジンタを訪れることはあまりない。

ミイナがうーんと唸る。

「いや、実は、最近魔王が復活したでしょ？　で、王様が私に魔王を退治しに行けって言うんだけど……」

レイが「え！？」と驚いた。
「相変わらず強引な方だね、セインの王様は」
「マジンタの王様は何も言わないの？」
「魔王について調べるように命令されているよ。それで何か倒す手段はないかと調べていたんだけど……」
「見つかった？」
レイは静かに首振る。
「そっか……」
溜息を吐くミイナの頭を、レイが血の付いてない方の手で撫でた。
「困るよね。僕達は勇者の子孫であって、勇者ではないんだけど……」
「そうだよね、迷惑だよ」
「魔王退治なんて考えただけでも――うげえ！」
ミイナは素早くレイの吐血を避け、回復魔法を唱える。
「カンチ！」
レイが荒い息を吐いてミイナに謝った。
「ごめん」
「うん、いいよ。でも本当に大丈夫？　いつもの倍、体が弱ってる感じがするけど」
心配するミイナに微笑み、レイは近くにあった布で床の血を拭く。
「で？　ミイナはセインを追い出されたのかい？」
「うーん、追い出されたというか、出て行かざるを得ない状況にされちゃった。でもさ、無理だよね。だいたい魔王って何処にいるの？」
投げ遣りな態度のミイナに、レイが血塗れの布をゴミ箱に捨てながら答えた。
「世界の中心にある、孤島にいるらしいよ」
「そうなの？　でもそんなところまで行けないよ。どうすれば……」
唇を尖らせ俯くミイナの顔を、レイは覗き込む。
「僕も一緒に行くよ」

ミイナがパッと顔を上げた。
「本当！？」
「うん。僕もちょうど、魔王のことを調べる為に旅立とうかと思っていたから」
壁に手をついて立ち上がるレイに合わせて、ミイナも立ち上がる。
「良かった。正直これからどうすればいいか分からなくて……」
「でも、僕達だけで旅をするのは、どう考えても無理があるね」
「うちの王様は、他の子孫を集めろって言ってたけど、誰か知ってる？」
ああ、とレイは頷いた。
「そうか。それなら、ウォル国にいるよ」
「え、本当？」
「うん。戦士をやっている。凄くいい奴だから、事情を話せばきっと力になってくれるよ」
ミイナが拳を握り、喜ぶ。
「戦士！　いいね！」
「決まりだ。準備をするからちょっと待ってて」
レイは部屋に散らばる本を数冊と、着替えを鞄に入れた。
「ウォル国って馬車でどれくらいかかるの？」
レイが首を傾げる。
「馬車？」
「あ、そうか、言ってなかったっけ。王様が馬車をくれたんだ。家の前に置いてあるよ」
「へえ、セインの王様はそこまでしたんだ。よし、準備が出来た。外へ行こう」
二人は家の外に出た。
「ミイナ、ウォル国までは移動魔法で一気に行こう」
荷物を馬車に積みながら言うレイに、ミイナが驚く。
「移動魔法なんて使えるの？」
「うん。一応ね」

「うーん、さすがマジンタ国一の魔法使い。頼りになる！」
感心したように頷くミイナにレイは笑い、杖を右手に持って掲げ、魔法を唱えた。
「それじゃあ行くよ。ビュン！」
二人と馬車が、一瞬で消える。
伝説の勇者の子孫、魔法使いのレイが仲間になった。

3　不在の理由

「カンチ！　カンチダ！　カンチシロ！」

小回復、中回復、大回復。

ミイナが三種類の回復魔法を唱えると、白目を剥いて地面に倒れていたレイの体がぴくりと動いた。

「はぁ、びっくりした」

ミイナがほっと胸を撫で下ろす。

レイはゆっくりと体を起こし、頭に手を当てて申し訳なさそうに微笑んだ。

「ごめん。移動魔法は結構大きな力を使うから、ちょっと体に負担がかかったみたいだ」

ミイナが頬を膨らませる。

「もう！　危うく旅立ち早々一人旅になるところだったよ」

「ごめんね。僕は回復魔法が使えないから、ミイナが一緒にいてくれて助かるよ」

レイはもう一度謝って、周りを見回した。

「僕達、注目浴びてるね」

「そりゃ、いきなり現れて死にかけてたからね」

二人は移動魔法『ビュン』を使って、マジンタから北北西の方角にある『ウォル国』にやってきた。

「さて、戦士に会いに行こうか」

レイが杖で体を支えて立ち上がると、遠巻きに見ていた屈強な体つきの人々が、警戒するように身を引く。

「なんだか凄い目で見られてるけど、私達、攻撃されたりしない？」

「大丈夫だと思うよ。この国は『戦士の国』なんだ。一般国民は魔法を見る機会なんて滅多にないから、驚いてるだけだよ」

「へー、そうなんだ」

レイが馬車の手綱を引いて歩き出す。ミイナはその横を歩きながら、レイに話しかけた。
「私、勇者の子孫ってレイしか会ったことがない」
「僕もこの国の――ああ、そういえばまだ名前を教えていなかったね、この国にいる勇者の子孫は『ガイン』って名前なんだ。で、そのガインとミイナしか会ったことはないよ。しかもガインと会うのは何年ぶりかな？　男らしい真面目な奴だよ」
「ふーん、協力してくれるといいけど」
「きっと大丈夫だよ。えーとそこの角を曲がってすぐだけど……」
レイは角を曲がって、二件目にある家の前に止まった。
「ここだ。こんにちは、ガインは居ませんか？」
トントンと玄関ドアを叩きながら、レイが声を掛ける。しかし中からの応答はない。
「留守？」
ミイナが訊き、レイが首を傾げた。
「おかしいな。ガインは仕事で居なくても、ガインのお母さんが家に居る筈なんだが。買い物にでも行ってるのかな？」
「ガインの仕事って何？」
「城の兵をしている」
レイは国の北にある、ウォル国の城に視線を移す。
「ここで待っていてもいつ帰ってくるか分からないし……、城に行ってみようか」
「うん」
「じゃあ、ちょっと距離があるから馬車で移動しよう」
レイがそう言いながら馬車に乗り込む。
「……歩いてでも十分行ける距離だと思うけど」
ミイナは小さく呟いたが、それでも体の弱いレイに付き合って馬車に乗り込んだ。
ミイナが座ったのを確認して、御者席に座ったレイが手綱を握る。馬は右へ左へと、よろよろとしながら城に向かって歩いた。

「なんか、やたら揺れてるよ」
「ごめん、僕は御者なんて初めてだから、上手く出来なくて……」
「レイ、交代」
ミイナがスパッと言ってレイを退かし、御者席に座る。そして――、
「それ行け！」
手綱で馬を叩く。
馬は嘶くと、猛スピードで走り出した。
「ミイナ！　早い！　危ないよ！」
焦るレイをよそに、ミイナはのんびりと答える。
「大丈夫だよ、このくらい」
「駄目だよミイ――う、うげえ！」
「ぎゃあ！　カンチ！」
ミイナが慌てて回復魔法を唱え、馬車を止めた。
「ご、ごめ……馬車酔い……」
「これぐらいで馬車酔いって……」
ミイナの魔法で回復したレイは、まだ少し荒い息を整えて、額の汗を拭う。
「ミイナ、もっと優しくしないと馬も疲れちゃうよ」
「うーん、もう。仕方ないなあ」
ミイナは唇を尖らせて極力ゆっくりと馬を歩かせ、程なくして馬車は城の前に着いた。
「到着！」
ミイナが馬車から飛び降りて、城門の前に立っているガッチリとした体型の兵に挨拶をする。
「こんにちは」
「こんにちは。あなたは旅人ですか？　ようこそ『戦士の国ウォル』へ！」

兵は大きな声で言って、敬礼をした。ミイナが兵の真似をして敬礼を返す。
少し遅れてレイも馬車から降り、兵に微笑んだ。
「こんにちは。僕はマジンタから来たレイという者です。この城の兵であるガインに会いに来たのですが、取り次いでもらえませんか？」
すると途端に兵が目を見開いて、レイとミイナを交互に見た。
「ガインに、か？」
その戸惑った様子に、レイが首を傾げる。
「何か不都合でもあるのですか？」
「いや、不都合と言うか……」
兵は唇を歪めて、悲しげな表情で城を指差した。
「ガインなら城に居る。城の――地下にある牢屋に……」
レイとミイナが「え！？」と驚いて顔を見合わせた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6928x/

Ｓ.Ｍ.Ｔ.クエスト

2011年10月22日03時12分発行